



### 同郷の友、人生を豊かに

この二月、伊那北高校の在京・関東地区の同期会が新宿で開催された。幹事の一人として準備諸般にあたったが、当日はあいにく急な海外出張が入り、残念ながら出席できなくなってしまった。

帰国後、盛会だったと聞きひとまず安心。五十代も後半になると、「オイ」「オマエ」で呼び合える、損得なしの気のおけない同級生同士、しかも同じ郷里の友との語らいは、年を重ねるにしたがって人生を豊かにしてくれるものだ。

### 中南米から見た日本は

出張先は中南米方面だった。かつても特派員として長年パナマに駐在、大陸の北から南まで取材で駆けたこともある。ところで、南米といえざる時、日本人がブラジル人の会話の中で「地球の裏側のブラジル」と言った。と、相手は即座に「何言ってるんだい。こちらから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と切り返した。なるほど、丸い地球には当然、裏も表もないわけである。

ちなみに、南米で見る地図の多くは、真ん中に北南米大陸があり、日本ははるか左上方の端に位置している。それぞれ“我が住む地”を中心にし、それを誇りとしているからなのだろう。「裏日本」「山

陰」といった地名への配慮も、そうした時代の流れの反映と  
思う。

それにしても、ががとしたアンデスの峰々、アマゾンの大密林、パンパの大草原、リマ周辺の砂漠地帯と、全体に  
広大で荒々しい大自然から、  
しっとりとした箱庭的な美しさの日本に戻ると、つい心も  
和んでくる。とりわけ、郷里  
の伊那に戻ると、淡い郷愁も  
手伝って、生命まで洗われる  
思いがする。

### 自然環境に恵まれる

中学校や高校の校歌も伊那谷の自然を詠いこんでいる。  
「高きを我に学べよと 天そ  
そりたつ駒ヶ岳・・・」  
「潔きを我にならへよと 地に天龍  
の水の音・・・」  
通学の途上、いつも仰いでい

た駒ヶ岳。夏には泳ぎ冬には川虫をすくった天竜川。人間形成の最大の環境は家庭と教師であろうが、自然環境の豊かさも、意識していないところで人間を育む大きな力になっていることは間違いあるまい。

ラテン・アメリカの人々の開放性、陽気さ、おおらかさ。伊那人の芯の強さと向学心、慎み深さもこうした自然環境から育まれているのではなからうか。

自然と人間との関係については名著「人生地理学」(牧口常三郎)もあるが、これは時代や世代が代わっても変わらない哲理だろう。伊那谷の自然の懐の深さ、暖かさはいつまでも残り、続いてほしいと心より願う一人である。